

父親たちのケアをめぐる新たな役割と家族・社会との関係の再編に関する研究
——育休を取得した父親たちの語りから——

松村智史 (名古屋市立大学大学院)

1. 問題提起・研究目的・研究方法・倫理的配慮

近年、男性の育児を促進する政策や啓発活動が展開されている。厚生労働省が2024年7月31日に公表した「令和5年度雇用均等基本調査」によれば、男性の育児休業取得率が約30%と過去最高となった。また、国内の研究において、男性の育児に関する研究の蓄積が進んでいる。国際的にも、ケアする男性性であるケアリング・マスキュリティ (Caring Masculinities) がジェンダー平等に貢献する新しい男性のあり方として提唱されている (多賀ほか 2023: 8-9)。他方、現実の父親たちに目を向けると、政策が意図する像とは異なる実態があり、父親たちがケアを担うことが増えても、様々な葛藤を抱えていることが考えられる。例えば、コンネルが提唱した、稼ぎ手役割や職業的成功などから構成される「ヘゲモニックな男性性 (hegemonic masculinity)」(Connell 2005=2022) の根強さが指摘される。特に日本では、性別分業意識や男性稼ぎ手モデルのもと、男性は父親となった後も稼ぎ手の役割を期待され、いわば一家の大黒柱としてフルタイムで働くサラリーマン像が根強いことが指摘される。他方で、近年の男性育児や、父親コミュニティの増加は、男性自身のケアをめぐる新たな役割や、家族・社会との関係の再編につながっていることも考えられる。

そこで、本調査では、主に東海地方で育休またはそれに準じる一定期間の有給休暇を取得し、父親のコミュニティに参加する計6人の父親インタビュー調査から、ケアをめぐる新たな役割や、家族・社会との関係などを明らかにすることを研究目的とした。インタビュー調査は、半構造化方式で、2023年11月～2023年12月にかけて行った。インタビューに際しては、調査の趣旨や公表方法などについて書面を用いて説明し、同意を得た。また、得られたデータは個人が特定されないように匿名化するなどの倫理的配慮を行った。なお、読みやすさの点から文意を損なわない範囲の加工を行った。

2. 分析結果・考察

分析の結果、育休を取得した父親たちにとって、育休経験は、ケアをめぐる自己の役割の捉え直し、価値観やキャリア観の変化、家族・社会との関係性を見直しといった、重要な契機として機能していた。

例えば、ある父親は、育休を経て会社を退職・独立するという人生の転機を迎えたが、それは単なる育児の分担ではなく、自らの人生や価値観を再構築する過程を伴う選択であった。一方、別の父親は、育休を「柔軟な転職」と捉え、家族との衝突や葛藤を経て育児や家族への姿勢を変化させていった。父親たちに共通するのは、育休を通じて、自身のケア役割の見直し、価値観の転換、家族・社会との関係の再編を行っている点である。

さらに、その過程において、父親たちは、他の父親たちがいるコミュニティで、思いや悩みを吐露したり、相談したり、互いに承認し合うことなどを通じて、孤立感の緩和、自己や家族の相対化、新たな気づきの獲得を経験し、その結果、ケアをめぐる自己の新たな役割を見いだしていた。また、こうした父親たちのコミュニティは、職場などでは得られにくい共感や安心を提供し、育児における父親の新たな役割の確立や、家族の捉え直し、家族・社会との関係の再編に寄与していた。育休取得を、育児の分担や制度利用の実績づくりにとどまらず、父親自身のケアをめぐる役割の変容、家族・社会との関係の再編の契機として位置づけ直す必要がある。また、そうした、変容していく父親たちを支えるコミュニティの制度的・文化的基盤が重要といえる。

(キーワード: ケアリング・マスキュリティ, 子育て, 家族)

参考文献

Connell, R. W. [1995] 2005, *Masculinities*, 2nd ed., Cambridge: Polity Press. (伊藤公雄訳, 2022, 『マスキュリティーズ——男性性の社会科学』新曜社)。

多賀 太・石井クンツ昌子・伊藤公雄・植田晃博, 2023, 「ケアする男は「男らしい」のか: ケアリング・マスキュリティの複数性に関する計量分析」『家族社会学研究』35 (1) : 7-19。